

## 都・建設予定地 生活記 (10)

あまり良く知られていないインドの西・グジャラート州で生活しながら、なんとかこの片田舎を都にしてみようと足掻く僕的生活記。

---

どこかへ旅行に行く。後からその時のことを思い出す。そうして「あの場所は……」と考えるとき、綺麗な景色とか立派な世界遺産とかそういうものより、そこでどんな人に会ったのかという方が、ずっと大きいような気がする。あの建築物は凄かったけど疲れるから行きたくないという場所もあり、何も無いけど良かったな、というところだってもちろんある。そういう場所は、きっと人が良かったのだと思う。

新鮮な魚が食べたい、とアーメダバードから一晩かけて、僕と大野君は漁村ヴェラヴァルへとやってきたのだが、実は今回の旅の目的はそれだけではなかった。この漁村近くにディーウと呼ばれる場所がある。元ポルトガル領で、連邦直轄領。ここでは酒の入手が容易なのだ。だから早くディーウへ行って、海でも見ながらビールを飲む。それが僕ら最大の目標で、そのためには一刻も早く魚を買わなければならない。なのに、どこで売られているのかが分からなかった。海に来るまで、市場を見かけなかったのだ。「魚市場ってどこにあるの？」そう聞くと、浜辺に来ていた男の子は不思議そうな顔をして僕らを見た。

「こっちだ」「この魚がオススメだ」「一匹で足りるのか」「これは買わなくていいのか」と、道案内を買って出たばあちゃんは所狭しと生魚や干物が並び、ぷんと生臭いにおいの立ち込める魚市場をずんずん進んでいく。

僕らが最初に道を尋ねた男の子たちが案内してくれたお店は閉まっていた。だがそこから、わらしべ長者的にランクアップを重ね、案内役はヒンディー語が分かる兄のアナンド君にバトンタッチされ、「俺の家に魚あるかも」と家を訪れると、わらわらと一族が集まってきた、中でもとびきり押しの強いばあちゃんに巡り会った。「持ってくなら新鮮なやつがいに決まってるんだ」とばあちゃんは僕らを連れだして、あっという間に魚のにおいで空気が満たされた市場にやって来た。ばあちゃんはエラの色を見て、これは新鮮じゃないとか、この魚は良いぞ、とか市場を見て回る。刺身でもいけそうな魚を指さして「これが欲しい」と言えば値下げ交渉まではじめる。それどころか発泡スチロールの箱まで買い、氷までどこからか手に入れて来て割砕いて魚と一緒に箱に詰めると、「こうすると溶けないんだ」と大量の塩まで振りかけてくれた。氷でパンパンになった箱をリキシャーまで持って行ってくれたのもそのばあちゃん、おまけにバス停まで20ルピーで行け！と指示まで出してくれた。頼りになりすぎる。このスーパーばあちゃんの手際で、僕らは午前中のう

ちにヴェラヴァルからディーウに向けて、バスに乗ることが出来たのだった。

氷でみっちり梱包されたままアーメダバードまで運ばれてきた魚は、刺身でも焼いても美味しかったし、お腹を壊すこともなかった。ヴェラヴァルは何もなかったけれど、いいところだった。本当にいい人達に会ったと思う。いい思い出として、ずっと残るだろう。

まあ、酒を飲みに行ったディーウでも魚市場を見つけてしまった今、もう一度行きたいかと聞かれたら「いや……」と黙ることになりそうではあるんだけど。

---

プロフィール：滝口浩平

2010年から約1年間のデリー留学を経て、東京外大ヒンディー語専攻卒業。色々あって塾・予備校の市進に雇われ、また色々あってインド現地法人 Ichishin India Consultant.Pvt.Ltd 社員となる。更に色々あって日本語教師として Pandit Denndayal Petroleum University (PDPU) で教鞭をとる。第29回織田作之助青春賞受賞。